

## 第6節 高校3年生

### 生き方を探るⅡ

杉本雅子・竹内史央  
松本真一・中村明彦  
佐藤喜世恵・大矢美香  
浅井希和・斉藤真子

**【抄録】** 高校3年生では、総合人間科の「自らの進路を主体的に選択する」という目標がいよいよ現実のものとなる。今学年では、進路系統別グループに別れて、フィールドワーク、スピーチ、論文執筆という3つの活動を行う。生徒は、総合人間科の活動を負担だとしながらも、活動を通して自他の個性に気付いたり、視野を広げたり、進路選択の意識を確かなものになっている。高校3年生の総合人間科は、教員にとっても、生徒や他の教員と進路について率直に話ができる機会となっている。

**【キーワード】** 進路 生き方 総合的な学習の時間

#### 1. はじめに

高校3年生は卒業を控え、総合人間科の「自らの進路を主体的に選択する」という目標がいよいよ現実のものとなる時期である。今学年では、「生き方を探る」という大テーマを掲げ、生徒が自分の進路を真剣に探ることで、自覚的に進路を選択することを目指した。また、今年度は、本校で取り組んでいるSSHプログラム全体の目標を、総合人間科にどのように取り入れることができるのかを探った。

#### 2. 学年の目標

自らの自己形成の過程を知り、主体的に生き方を選択することができる力を育てる。進路問題を個人の問題とせず、系統別グループ内で検討し、実りある進路選択を行うことができるようにする。具体的には、学外でのフィールドワークによって自分の進路に関係のある人から直接学んだり、スピーチや研究集録の形式で自らの意見を発表したりする。これらの活動を通して、自分の将来に対する認識を深め、総合人間科の目標である「自分の人生を自覚的に選択する力を育てる」ことの達成をはかる。

また、SSHの目標については、以下の3つの力をつけることを目標にした。○印の数字は優先順位である。

- ①E：自分の生き方について考える力
- ②B：理解し・考え・発表する力
- ③C：人や社会のために学習内容を活用する力

①「E：自分の生き方について考える力」については、自分が将来について漠然と考えていることを言語化し、進路希望を明確にする。その現実のために必要なことについて適切な方法で調べたり、他者に援助を求めたりすることができることをねらいとした。

②「B：理解し・考え・発表する力」については、自己の経験を自分で意義付けて発表するとともに、他者の発表を共感を持って聴く。こうした活動を通じて、本質的な話し合い、聞き合いができる集団作りを目指した。

③「C：人や社会のために学習内容を活用する力」については、総合人間科の活動の過程で生じた疑問点を放置しないで、適切な手段、方法を用いて調査し、自分が得た情報を他人も活用できるように整理して提示することができるようになることをねらいとした。

#### 3. 学習方法

個人研究の形態で、進路系統別グループを編成した。1グループは20名前後で、教員1名が担当する。

前期は学外でのフィールドワークを行い、自分の進路に関係のある人から直接話を聞く。その後、グループ内で報告し、経験を共有した。後期は前期のフィールドワークを基にして、さらに自己の考察を加えて、自分の生き方や進路に関してのスピーチを行い、卒業論文を執筆した。

#### 4. 一年間の活動実績

- ① 4/9 第6限：概要説明・アンケート
- ② 4/15 第6限 進路希望系統別グループ発足
- ③ 4/22 第6限 フィールドワーク先検討
- ④ 5/13 フィールドワーク先決定
- ⑤ 5/20 依頼状・質問状発送
- ⑥ 5/27 フィールドワーク先報告会
- ⑦ 6/3 フィールドワーク
- ⑧ 6/10 フィールドワーク報告会：グループ内<夏休み 大学説明会・オープンキャンパスなど>
- ⑨ 9/2 スピーチ原稿・集録原稿執筆①
- ⑩ 10/15 スピーチ原稿・集録原稿執筆②

- ⑪ 10/28 6限 スピーチ原稿・集録原稿執筆③
- ⑫ 11/4 スピーチ：グループ内
- ⑬ 11/18 スピーチ：学年全体
- ⑭ 12/10 研究集録原稿完成
- ⑮ 1/14 振り返り

## 5. 系統別グループ

進路希望の系統別にほぼ均等な人数になるように生徒を割り振り、18~20名のグループを6つ作り、学年団の教諭が分担し、グループ内での取り組みを援助した。どのグループもリーダーとサブリーダーを決め、発表会などの運営は生徒が担った。

| 班 | 系 統                      | 人数 | 担当教員          |
|---|--------------------------|----|---------------|
| 1 | 人文科学                     | 20 | 大矢・浅井・<br>齊藤※ |
| 2 | 社会科学                     | 18 | 杉本            |
| 3 | 工学                       | 19 | 竹内            |
| 4 | 理学・農林水産                  | 18 | 松本            |
| 5 | 医学・歯学・薬学                 | 20 | 佐藤            |
| 6 | 人文・教員・家政・芸術・<br>体育・技能・就職 | 19 | 中村            |

※ 教員は「大矢」「浅井・齊藤」が交代で担当した。

## 6. 生徒の取り組み

### (1)フィールドワーク

フィールドワーク先は、「自分の進路に関係する所」と大きく提示して選択させた。その解釈としては、「志望大学」、「自分が専攻したい学部学科」、「自分が将来取り組みたい研究テーマを扱っている研究室」、「自分が将来就きたい職業」などがある。

また、フィールドワーク実施日時を、6月3日（木）の午後に設定した。フィールドワークがこの期間に出来ない場合、当日は授業時間が終わるまで、教室で待機とした。そして、当日の授業後や他日の授業後、土日などを使って各自で対応して行ってもらった。

以上の条件で、生徒が希望する所に自分で電話を入れてアポ取りをし、依頼状、質問状をお送りして行うフィールドワークであるが、約3割の生徒がフィールドワーク先として名古屋大学やその関連施設を選択している（表参照）。このことから、生徒達が心理的にも地理的にも名古屋大学を身近に感じていることがわかる。名古屋大学を始め、フィールドワークを受け入れて下さった方々に改めて感謝申し上げます。

(表)

| FW先        |                | 人数  |    |
|------------|----------------|-----|----|
| 大<br>学     | 名古屋大学（関連施設を含む） | 35  | 58 |
|            | その他大学          | 23  |    |
| その他（市役所など） |                | 56  |    |
| 合計         |                | 114 |    |

事後の報告会では、1人3分程度でフィールドワークで自分が学んだこと、気付いたことを発表した。実際に人と会い、じかに学んだことには迫力があり、いきいきと語る姿には皆が引き込まれていた。一方で、フィールドワークへの意欲が湧かず、形だけの手続きをして手近な場所で簡単に済ませた生徒もあり、意欲の濃淡が顕著になった。

今回、目立ったのはアポ取りのやりとりをメールのみで済ませるというケースである。本校の総合人間科では、依頼状、お礼状を手紙で出すことを学習として位置づけ、指導しているが、メールの迅速かつ簡便であることを考えると、今後はメールのみで済ませるケースも増えるだろう。

### (2)生き方に関するスピーチ

フィールドワークの後には、スピーチに取り組む。スピーチ、卒業論文の内容については、次のように提示した。

内容は、「①総合人間科で追究したテーマについて」か「②自分史的なもの」、この2つを融合させたもの、などです。高校3年生で行ったフィールドワークのことだけを書くものではありません。みなさんの生い立ちや、高校3年間など、ある程度長期間にわたることを対象にして書いて下さい。スピーチの内容を使って研究集録の原稿（注：卒業論文のこと）を書くといよいでしょう。スピーチと研究集録の原稿の内容を変えてもかまいません。

これに従い、3分間スピーチを行うために、1200字程度原稿を作り、グループ内でスピーチを行い、聞き応えのある3名を投票で選んだ。

各グループから選ばれた3名、計18名が学年全前で体の前でスピーチを行った。代表者には事前説明会を行い、タイトルやスピーチをする上での注意を確認した。その時にスピーチの順番も決めた。以下に当日のプログラムを示す。

開会の言葉

スピーチを聴く上での注意

「生きる～人と人とのつながり」

「環境問題」

「自分史」

「アイデンティティとは何か？」

「ヒト（選択）」

「法と精神」

「総人を通して考えたこと」

「人の為そして自分の為」

「航空従事者」

（休憩）

「迷走」

「母の涙」

「無題」

「自分史」

「自己半生～ Reflect on My Life ～」

「数」

「疎外された労働」

「私はこんな人なんです。」

「ふるさと」

閉会の言葉

スピーチの指導をする際に心がけているのは、生徒の本音を引き出すことと、真剣に聞かせることである。本音でないスピーチは語りたと思わないし、聞きたいとも思わない。だが、「聞いてくれる」という信頼感がなければ、本音を語ることはできない。

だから、スピーチを行う時は、たいへん気を遣うのだが、事後のアンケートで、「おもしろかった」「他の人の意見が聞けて良かった」という感想を読むと、やってよかったとほっとする。もちろん好意的な意見ばかりではないが、それぞれの生徒がスピーチに真摯に取り組んだという感触を得た。教えられたのではなく、自分で気付くことで深く身につくと信じている。

以下、生徒の感想を挙げる。（下線は筆者）

・ 人それぞれ考えは違ったけど、コミュニケーションや人の役に立つことなど、人との関わりに視点を置いている人が多かった。人間関係はとても大切だと思う。

・ 改めてみんな様々な興味関心を持っていることがわかって、予想外に知識欲がぐっと深まった。自分は自分のことを人に話すのが嫌だった、というかできない。でも、こういう機会に話せている人たちは輝いてるなあと思った。本を読みたい。

・ 昔は、TとかKたちが言っていたような事を不思議に

思ったり、考えたりしてたなあーって思った。でも、いつからか自分の身近な生活に関する事だけに興味を注ぎ生きていた。が、哲学だったり、物理とかもやっぱりいいなと思った。

・ 全体的に「なぜこの人が選ばれたのか」疑問に感じる人が多くがっかりだった。これで総人がしめなのかと思うと、不完全燃焼感がいなめない。僕らの学年は最後まで僕らの学年だった。

・ ほとんどの人が高3ということもあって、自分を見つめたり、過去を振り返っていた。この小さな学校（注：中学は1学年2組80名、高校は1学年3組120名）に、3年あるいは6年一緒にいたのに、初めて知ったこともあった。総合人間科がそれぞれに与えている影響は小さくないのだと改めて感じました。

・ 生き方を探る、というよりは、一般論やら、それに対する考察みたいなモノが中心だった。別にそれが悪いといってるわけじゃない。ただ、3分でまとまっている発表時間に縛られて行動するのはなんか息苦しい感じがする。

・ フィールドワークのことをただ話すというものではなく、自分のことについて話すというものがすごく新鮮だった。自分は、グループでの発表をしっかりと準備せずにして、テキストだったので、ここに選ばれてきた人の真剣さを感じた。もっと考えてやりたい。集録はいいものにできたらよいです。

・ 聞きたくなる話をする人は、話の軸がしっかりしてて大きく明るい声で前を向いて話す人だと思う。発表は難しい。

・ やっぱりチームごとに傾向というものはあったけれど、本当に様々な生き方で見ている、聴いているこちらもおもしろかった。確かに聞く話すということは必要かもしれないけれど、こんな学年全員の前で赤裸々に夢を語るなんて可哀想だと思う。せめてグループ内の発表にすべき。

### (3)卒業論文

スピーチの後は、卒業論文（2700字程度）に取り組んだ。受験勉強と並行して執筆するために、焦りを感じた生徒も多かったのだが、書くことで自分の気持ちを把握することができ、勉強への意欲が高まったり、志望理由書を書く手助けとなったりと、良い効果もある。以下に、各班の卒業論文のいくつかの題名を挙げる。

1班 (人文科学)

「心の先進国」「私の進路」「総合人間科と私」  
「介護について」「お仕事について」  
「犯罪心理学を通して考える人とのつながり」

2班 (社会科学)

「部活道」「総人の6年間を振り返って」  
「樹木医」「ドガの一生」

3班 (工学)

「ロボット技術者に向けて」「『マニア』から『プロ』になる ～好きな仕事に就くために～」  
「僕と自動車 ～花冠という名の歴史を背負うクルマとともに～」

4班 (理学・農林水産)

「人のための化学」「宇宙の始まりと終わり」「魚類の多様性」「カーボンナノチューブ」「ベートーヴェンから学ぶ『生き方』」

5班 (医学・歯学・薬学)

「医療と経済」「My 総合人間科 Story」  
「破格格」 「法と精神」 「Co medical」

6班 (人文・教員・家政・芸術・体育・技能・就職)

「社会に役立つ仕事」「美術に触る」「自分にとっての先生」「Stage Art」「自分と野球と先生」

(4)振り返り ～アンケート結果～

高校3年生の最後の総合人間科の授業で、振り返りのアンケートを行った。学年の生徒114名のうち、96名が回答した。ここでは、2年前(平成20年度)の高3生(120名中106名回答)と比較してみたい。生徒数に10名の差があるが、以下の表中の数字は「実際の数」とした。

1) 次の生活スタイルの中で、共感できるものがあれば3つまで( )内に1～3の順位をつけて記入して下さい。また「こんな生活は絶対に望まない」というものがあれば×印(いくつでもよい)を記入して下さい。※順位は考慮せずにカウントした。

| 共感できる生活スタイルは?            | 22年度 |    | 20年度 |    |
|--------------------------|------|----|------|----|
|                          | ○    | ×  | ○    | ×  |
| 社会のために役立ちたい。             | 32   | 1  | 48   | 1  |
| 社会的に偉くなりたい。              | 23   | 8  | 9    | 13 |
| 自分のことは考えず企業の発展のために尽くしたい。 | 4    | 25 | 2    | 36 |

|                          |    |    |    |    |
|--------------------------|----|----|----|----|
| 経済的に豊かな生活を送りたい。          | 50 | 0  | 57 | 1  |
| 楽しい生活をしたい。               | 84 | 0  | 91 | 0  |
| 自分の能力をためす生き方をしたい。        | 44 | 2  | 53 | 0  |
| 別にこれという目的もなくのんきにやっていきたい。 | 19 | 13 | 18 | 16 |
| 世の中に背を向けても自分なりに生きたい。     | 17 | 11 | 16 | 9  |

どちらの年度の生徒も、「楽しさ」という「自分の満足感」を大切にしている。

今年度(22年度)の生徒の特徴は、「社会的に偉くなりたい」という生き方を志向する者が多いことである。「偉く」という言葉に曖昧さがあるが、社会の中で成功したい、際立っていたいという意識を反映しているだろう。リーダーになりたいという意欲と自負のある生徒が多いのかもしれない。

2) 現在のあなたの進路決定、職業選択について何が重要な要因となっていますか?次の内から当てはまるものに○をつけて下さい。○はいくつつけてもよい。また「その他」の欄には具体的に記入して下さい。

| 進路決定の要因は?    | 22年度 | 20年度 |
|--------------|------|------|
| その職業の社会的意義   | 26   | 35   |
| その職業の収入の高さ   | 23   | 34   |
| 自分の能力・学力との関係 | 30   | 39   |
| 自分の個性・性格との関係 | 46   | 64   |
| 自分の興味・関心との関係 | 84   | 92   |
| 親の意見         | 5    | 10   |
| 身の周りにいる人の影響  | 16   | 25   |
| テレビや映画の影響    | 11   | 16   |
| 仕事が楽しそう      | 28   | 49   |
| その他          | 9    | 9    |

進路決定については、どちらの年度の生徒も自分本位で考えている。中でも「自分の興味・関心」を第一にしている。「仕事が楽しそう」という回答も、これに準ずると思われる。

今年度(22年度)の生徒の特徴は、「親の意見」を選んだ生徒が少ないことである。保護者の方は、本人の進路希望を尊重し、応援されていることと思う。実際の数だけを見ると、生徒本人が自分の内面を見つめ、必要な情報を集めて進路決定をしている姿が浮かんでくる。

その他の要因としては、「次の目標のため」「ずっと続けられそう」「本の影響」「流れて決まる」「部活動」「悟った」というものがあつた。

3) 高1の時にいった進路適性検査は役に立ちましたか。「はい」か「いいえ」のどちらかに○をつけ、その理由も答えて下さい。

| 進路適性検査は役に立ちましたか？ | 22年度 |    | 20年度 |    |
|------------------|------|----|------|----|
|                  | ○    | ×  | ○    | ×  |
| 「役に立った」          | 19   | 76 | 25   | 75 |

進路適性検査は、様々な職業があることを知ることができた場合、あるいは自分の志望する職業を適性だと判定された場合は役立ったと感じるようであるが、基本的には「自分の意志ありき」だろう。高校1年生で、進路への意識付けとして行うのがよいと思われる。

4) 現在の社会、世界が抱えている問題は何だろうか。あなたの考えを述べなさい。

20年度の生徒が挙げた問題は、「温暖化などの環境問題」「不況や雇用など経済問題」「差別・偏見や紛争など国際問題」などである。

今年度(22年度)の生徒が挙げた問題は、「環境問題」「日本経済(国債・税金)」「資本主義の限界」「人口が増えすぎ」「高齢化」「学歴」「日本の地位の低下」「格差」「食糧」などである。

5) あなたは社会の一員として何をなすべきだと思いますか。あなたの考えを述べなさい。

20年度の生徒は、「自分がどういう姿勢で日常を過ごすか」「どんな社会人になるか」という内容が多かった。

今年度(22年度)の生徒は、上の事に加え、「教育」や、「できることをする」「節電」「人が意識を向けないことにも意識を向ける」など、具体的な行動を書いた者が多く見られた。

6) 進路選択にあたり、総合人間科の活動で役立ったものがあれば書いて下さい。3年生の活動に限りません。何年次のどんな活動なのか、具体的に書いて下さい。

20年度生の集計の結果は以下の通りである。( )内は回答の数である。

- ・高3「生き方を探る」(60)  
「すべてのFWでの経験。アポ取り、依頼状を送るなど。マナーも実際に体験してこそ身につくものだと思うし、自分の知識を身につけるのにも役だった。」
- ・フィールドワーク (49)
- ・アポ取りと実施 (5)
- ・スピーチ (3)
- ・卒業論文 (3) …「自分を見つめ、自信を持てた」

- ・高2「国際理解と平和」(12)  
…「沖縄はものの見方が変わる」
- ・高1「生命と環境」(13)
- ・中3「国際理解と平和」(7)
- ・中2「生命と環境」ディベート (4)
- ・中1「生き方を探る」(9)

高3の活動を挙げる回答が最も多くなった。中でも役立ったと感じられているのはフィールドワークだ。フィールドワークだけでなく高3のすべての活動は生徒の「主体的な進路選択」に有効であると感じているようだ。

一方、今年度(22年度)の生徒は、以下の通りである。

- ・高3「生き方を探る」のフィールドワーク (35)
- ・高1「生命と環境」のフィールドワーク (30)
- ・高2「国際理解と平和」の研究旅行 (24)
- ・中2「生命と環境」(10)
- ・中1「生き方を探る」(9)
- ・中3「国際理解と平和」(7)

各学年のフィールドワークから強く残っているようだ。また、今学年の特徴として、中学、高校とも「国際理解と平和」の取り組みを挙げる生徒が少なかった。記入されていることを読むと、広島、沖縄を訪れ、強い衝撃を受けたことがわかるのだが、記入した生徒は少なかった。進路決定との関係では上がりにくかったのだろう。以下、生徒の意見を挙げる。(下線筆者)

- ・これとって具体的なものはうかばないが、今までの総人でたくさんを知り、考え、いろんな経験をしたことが、結果的に今の考えや思いを存在させているのだと思う。
- ・高3。自分が進路で迷っているときに、本当に自分を考える時間となった。
- ・フィールドワークで興味のあることを深く知れた。沖縄や広島での平和学習はこれから生きる上で必ずいい経験になってくる。
- ・高校1年生、3年生のFW。(中学3年間でのFWも)いろいろな仕事、立場の人と直接会って、話せたことが大きかった。自分の興味のあることについて、お話を伺った人の意見を知れて視野が広がったと思うし、自分の意見に対して、返事を頂けるのも嬉しかった。FWが一番自分がこれからどうしたいかを考えるきっかけになったと思う。
- ・名大附属のついで、名大の研究所などにFWに行かせてもらえて、興味深い事が学べて、進路決定に役立っ

た。中2の脳関係の教授の元へ行ったのは心に残った。

- ・全て役立った。中学では、手紙の書き方など常識を学び、高校では、進路を決定する際、FWで学ぶことができ、自分の適性を確かめられた。

7) 総合人間科についてメッセージがあれば書いて下さい。

どちらの学年も、総合人間科を肯定的に捉える意見が多かったが、アドバイスや批判を述べたものもある。教員としては、肯定的な意見は追い風となってありがたいが、批判を書く生徒の存在も緊張感を与えてくれる。どちらの意見も聞き、今後の授業に取り入れていきたい。

まずは、20年度生の意見を挙げる。

- ・過去のレポートからおもしろいもの、奥深いものなどを資料として配るべき。
- ・「あまり堅く捉えなくていい」ということを伝えなければ取り組みにくい。
- ・テーマ自由って、すばらしいと思う。
- ・修学旅行と総合人間科を結びつけないで。
- ・職業体験とかのほうが効果的。
- ・これからも続けて下さい。授業が全部総人みたいないいのと思ったこともありました。
- ・学術的質を確保すべき。評価が甘すぎる。
- ・考える力などが一番伸びる科目。
- ・大学に入って、どのように役立つか楽しみ。

続いて、今年度(22年度)の生徒の意見を挙げる。今年度の特徴として、高3での負担の大きさを不満とする意見が多く見られた。

- ・6年間、真面目にやってきてよかった。平和について学び、今の自分はいかに幸せか、を知ることができた。これは、今の私に影響してると思うし、今後も役立つと思う。でも、てきとーにやっても、Aがとれるという感じで生徒の間で認識されていることには、問題があると思います。

- ・中1～高2までの活動はとても有意義なことだと思う。自分の場合、進路選択には役立たなかったが、者を考えるいい機会にはなった。しかし、高3の活動は必要ない気がする。指導をする先生方の「とりあえずやっておけ」というようなニュアンスの発言も見られた。どうしても高3の活動内容が総人かんせいに必要であれば、高2までに完成するようなカリキュラムに組み直せばいいと思う。

- ・なんだかんだおもしろい教科でした。でも、受験で忙しい3年生には落ち着いてできない教科だと思いました。せめて3年の1学期までにすればもっとみんな真剣に取り組むことができるのではないのでしょうか。

- ・今の世の中に求められている教科だが、今のままでは腐敗する。今一度総人を見つめ直し、総人を新しいものとして生まれ変わらせる必要がある。  
見直す点①生徒の総人に対するモチベーションの低さ  
②FW、集録以外の総人の活動  
③研究集録の利用法

- ・周りの人たちは、すごくイヤイヤやっていたイメージが強いけど、私みたいに、きちんと取り組めば、すごくいい機会だと思う。自分の将来としっかり向き合える時間が増えるのは、この受験地獄で、自分の夢も決められない多くの学生に、とても役立つはず。もっと総合人間科を生徒みんなに大事にしてほしかったです。

- ・大学に入ってから後悔するようなことにはならないだろう。追跡調査をした方が良いのではないか。

- ・自分がやりたいこと、大学決めなどにとっても役に立ちました。自分では調べようと思ってもなかなかできないけど、総人という機会があって、調べることができたのがよかったです。

- ・一週間に2時間もやるのはもったいない。(※実際は隔週木曜日の午後の2時間)強制的にFWや集録を書かせるのはどうかと思う。得をする人よりも時間を失い、損している人の方が圧倒的に多い。

- ・今ではインターネットなどで多量の情報を得られるので、下調べの段階で自分のテーマに殆どカタがついてしまう。でも、学校はFWに行けというので、仕方なく適当な人に、自分でもすでに知っている事を聞きに行くことになる。これが生徒の大半が総人の時間にやっていることの実態です。聞くべきこともなくFW

に行くことは相手に迷惑もかかる。

## 7. 成果と課題

### (1)成果

成果としては、次の2点が挙げられる。1つは、「高校3年生の進路決定に、総合人間科は役立っている」ということ。もう1つは、「総合人間科は、生徒同士はもちろん、生徒と教員および教員間のコミュニケーションの機会を増やしてくれる」ということである。

1つめの、「高校3年生の進路決定に、総合人間科は役立っている」について。

高校3年生での総合人間科は、先に挙げた生徒の意見にもあるように、受験勉強時間との兼ね合い（それは時間だけでなく、「課題ができない」という精神的な圧力も含め）が厳しいことや、実際に人と会うための手続きや実際にその場に出向く労力の大きさなどを考えると、生徒にも教員にも負担は大きい。しかし、そのような労力という代償を払って、得るものもまた大きいといえるのではないかと。人と人とが実際に対面して生まれる感動は、言語化し尽くすことも、数値化もできない。それでもその経験は心に刻まれ、その人の内面形成に寄与している。高校3年生のFWをして、研究者や働く人に会ったこと、スピーチをしたことや聞いたこと、卒業論文を書いたり読んだり、生き方を語り合ったこと。手間はかかるけれども、その分だけいろいろなものが蓄積され、進路選択に深く影響している。それは、事後のアンケートから伝わってくる。

2つ目の「総合人間科は、生徒同士はもちろん、生徒と教員および教員間のコミュニケーションの機会を増やしてくれる」について。

総合人間科の授業を媒介にして、生徒同士の学び合いが始まる。それは、共通の問題を抱え課題を進める上で自然にそうになっていく。

それから教員は、生徒の進路（生き方）を考える上で、「受験」を意識してしまうのだが、総合人間科の系統別グループの場では、生徒の「思い」に焦点をあてて話がしやすい、という利点がある。総合人間科創成の理念は、「脱教室・脱教科・脱偏差値」と聞く。その理念に添い、教員が、教科の意識、担任の意識、偏差値を離れ、一個の人として生徒の生き方へのアドバイスができる。

もう一つ、教員間のコミュニケーションも取りやすくなる。総合人間科には学年団全員が取り組むので、学年の教員全員が、生徒の進路希望を把握でき、生徒の情報や進路情報のやりとりが活発になる。これは、総合人間科が授業としてカリキュラムに位置づけられていること、教員全員が総合人間科に取り組むこと、1学年が中

学2クラス、高校3クラスで、学年の生徒や教員の顔が見える規模であること、など本校ならではの環境があるからこそ可能だと考えている。

### (2)課題

課題としては、「パソコン、インターネットの活用」と「総合人間科の内容のマンネリ化」の2点が挙げられる。

まず、「パソコン、インターネットの活用」について。本校では、総合人間科の授業でパソコン室を利用する。目的はほとんどインターネットによる検索である。質問が決まっていれば、ピンポイントで答えを得ることも可能だ。しかしそれでは、体系的な知識を身につけることから遠ざかってしまう。また、ネット上の情報は玉石混交で、間違っただけの情報や怪しい情報を真実だと受け止めてしまうこともある。インターネットでの調査はするが、最後は本で確認をするということをも身につけさせたい。ネットと本の両方を上手に活用できるようになってもらいたい。

2つ目の課題は、「総合人間科の内容のマンネリ化」である。毎年指摘されていることでもあるが、社会情勢やその学年の生徒の気質によってアレンジを加えるためには、1年間の流れ、6年間の流れが決まっている方が対応しやすい。現在、総合人間科も開始から10年以上が経ち、授業で使用するプリントもデジタル化がされ、教員が共有できる形でストックされている。あとは、その型にどんな工夫を加えるか、である。社会や生徒の変化に対応するために、日頃からの情報収集が必要である。

(文責 杉本雅子)